

## 「語り」の持つ力の大きさ

佐藤淑子

平沢保治さんの「語り」から浮かび上がってくる人としての生き方の素晴らしさに感動した私は週末国立ハンセン病資料館に足を運びました。工夫を凝らした展示からハンセン病の歴史を学び、証言コーナーでは多くのハンセン病回復者が自らの人生を語る姿に心打たれました。これは稲葉さん達学芸員がハンセン病回復者一人一人の存在に敬意を払い、単なる資料の収集としてではなくその人の人生と真摯に向き合い、一人一人の人生の価値を多くの人達に伝えたいと強く願ったからこそ42名の方が自分の思いをカメラの前で語ってくれたのだと思います。ハンセン病回復者の「語り」を入れたことで、苛酷な状況にあってもなお生きる意味を追求し力強く生き抜いてきた一人一人の姿がかけがえのない存在として訪れた人達に切々と伝わってきます。

また「語り」だけでなく展示してある陶芸や絵画等の作品のひとつひとつも制作者の人生を力強く物語っています。今回は特別展として塔和子展が開かれていました。大島青松園に暮らす塔和子さんは99年に高見順賞を受賞した詩人で、ハンセン病という苛酷な人生の中から人間の本質を鋭くえぐり詩という形に凝縮して私達に問いかけています。

家族や故郷から強制的に引き離され療養所に隔離され、知覚麻痺や視覚障害を患ってもなお「恨みを恨みで返さない」と言って与えられた命に感謝し、人の為に生きることを喜びとしている平沢さん。この平沢さんの人生を年譜やパネルで紹介しても決して平沢さんの生きる姿、生きる意味は伝わってきません。「語り」だからこそハンセン病という苦しみを、生きる喜びや生きる力に高めていった平沢さんの魂に直に触れることができたのです。

ハンセン病で療養所に隔離された人達も高年齢化しています。語り部の証言をビデオに残して後世に伝えていくことは私達が同じ過ちを繰り返さないためにも必要です。今回平沢さんをはじめハンセン病回復者の「語り」を聴くことで改めて「語り」の持つ力の大きさを認識しました。